

# 風歌のふる

⑨

齋藤 史



りんご倉庫の私の部屋が、若い人々の集会所になったのは、いつ頃からだったろうか。雨の日、つまり畑仕事から解放される日は、わたくしの小部屋が賑わうことになり始めた。

青年団、女子青年団はあるものの、彼等が心から打ちとけて仕事や話し合いなど持っていたとは思えない。何しろ真昼間の村を貫く県道を、中年の夫婦が一緒に歩いてさえ笑われる土地なのだ。まず亭主が、とつと通りすぎ、間を置いてから女房が両手に大荷物をさげてせかせかと同方向へ行く。隣の駅から同じ汽車に乗るためだが村内は必ず別々に行くのである。男女が一緒に歩くなど「恥しい事」とされている。

私の部屋では一つの炬燵を囲むしか場所がない。火が無くても板を乗せてテーブルがわ

り。土地の娘も疎開の娘も、村の青年、他村の青年、来た者は空いた所へ坐る。それだけでも何となく楽しくなり、笑声がおこる。話は何でもいいのだ。

例えば、「紅茶で、いうものは、匙で掻き廻して皿にかけて冷まして飲むんか、ちや、」でも、「前の水増しの時は、田んぼのいなごが堤にみんな上って来て、とんだ沢山に獲ったおぼさんが居た」ことでも、「村のえらいお父さん達が、千曲川の中洲でこっそり酒盛りしていて、上流の雨に水量が増えて帰れなくなり、着物丸めて頭に乗せ、ふんどし一つの半泣きで渡って来るのを、一同こちらの堤の上に並んでたつぷりと笑って眺めた」という、おやじから聞いたはなしでも、「そう言やあ、この春だつて、堤防が危ねえつて消防団が出るのに、

長いとも、網持って、岸にふらふらになって寄ってくる魚掬って歩いてたおつさんが居た」でも、かまわない。彼等にはその誰かが見当がつくらしく、私には解らない。が、話の洩れる心配は無い。

\*

小童たちの仲間が、或日、雉鳩の雛を二羽、巢からとって来た。この家に、小鳥の飼える箱（前面に金網の張つてある）があることを知っているのである。藁を敷いて入れた産毛のかたまり二つ。大豆の粒を丸ごと水に浸して置いたまま帰ってしまった。これでは駄目だ、と見ていたが、案の定、翌日小さい方は死んでいた。

見に来た子供たちに、「おぼさん、あずかっで見ようか？」と言った。鳩を育てたことは無い。けれどもこのまま見過せなかつた。

鳩のミルク、というのを聞いたことがある。親鳥の喉に入れて吸うという。やってみるしかない。私の夕食のお粥に近い軟かな御飯を潰して何とか食べさせてみよう。

ところが口を開かない。木の枝の先にのせてさし出しても、嘴を浸してみても、塗ってみても、雛は金輪際口を開かないのだ。とにかく食べさせなければ死んでしまう。苦心と根比べのあげく、小さな産毛の生きものの、結局は嘴をこじ開け、僅かの汁を流しこんだ。

# 雉鳩



翌朝、彼はまだ生きていた。三日目も生きていてくれた。口を傷つけずにこじ開けるために、少しでも多く流しこむために、膝を抱いて時間をかけた。一七日目、少し産毛が伸びたような気がする。

悪童達はときどき覗きにくるが、無責任に何もしない。いつの間にか見物の側に廻って、「おぼさんの鳩」という。育つと決めていて「箱ん中で、デデッポと鳴いたら面白いのう」と言う。

彼の嘴の上が擦り剥け、私がかへとへとなる頃、パクツと口を開く事を覚えた。ただしすぐ閉じる。餌を入れる間はない。続けては開けないでそれきりまた頑固なへの字の口。ただし食べる意志を示したのだから、もうひととき。

彼が自分で配給の小麦の粒を拾った日、私は涙が出た。これで彼は自分で生きてゆけるのだ。でもそれだけ私達一家の食糧は減る。

お米代りの麦、粗く引割りにして炊けば白く弾けて、一見お米のようなだが、ばらばらしてお結びには出来ない乏しい主食であった。寒くなつて彼の箱を倉庫の土間に移した。

板戸を隔てて互いの気配が解る彼と私。寂しい真昼間、ふと「ポオ！」と呼んでみた。「ヒイ」と言った。まさか—とおもいながら、また呼んだ。「ポオ！」——「ヒイ」と彼はたしかに答えるのである。抱き上げて部屋に連れてくると畳の上を歩き廻つて遊ぶ。

そしてある日、彼は突如として、大声で鳴いた。「ブウ・デデ」何とも言えないような、聞いた方が顔が赤くなるような下手な調子であった。慌てて板戸を開けて箱を覗いた。彼は自分でも、「あきれた！」というように、丸い眼で私を見た。

首の囲りの羽の色も美しい艶と光りを持ち、鳴き方も上達した春近いある日、白い小さい卵がその巢の中に産んであった。彼ではなく

彼女であることに私達はおどろき、そして別れのときが近づいたことを知った。

空に放した彼女は夕暮に帰つて来た。餌を食べて朝にまた発つていった。井戸端のなつめの樹に来て見ていることもあった。それが全く来なくなったとき、たぶん仲よしが出来たのだらうと私の家族たちは言ひあった。

\*

人間の若者たちの方は、集まる人達の中から「弁論大会」に出て入賞をして来る者が出た。原稿や話し方について少しばかり相談のつたのである。読書会のようなものが出来たり、短歌を書いて来る者もある。身近の地域語を集めて共通語との比較。これは、中学を出た者達が集団就職をして都会にゆき第一につき当る問題であった。雑談の楽しみと共に、どうやら勉強の方向へ変化を持ちはじめたものの、(詩を作るより田をつくれ)の風土の中、果していつ迄続くかは解らなかつた。

——種は蒔いても、必ず育つとは限らないのが現実というものなのだ。

消炭を吹き立てていくばくの炎あり  
雪の重たきわがいとなみに  
ゆく末を何に懸けつつこの若き人が  
いで立つ凍て雪の中

(さいとう・ふみ「原型」主宰)